

主 題：測り知れない主の恵み

聖書箇所：詩篇 36篇

テーマ：罪がいかにか汚れたものか、神様がいかにか恵み深いお方なのかを考える

今朝、ともに学んでいきたいみことばは詩篇36篇です。いつものように、まず神様から与えられたこの大切なみことばをお読みします。

詩篇36篇 指揮者のために。主のしもべ、ダビデによる

「:1 罪は悪者の心の中に語りかける。彼の目の前には、神に対する恐れがない。:2 彼はおのれの目で自分にへつらっている。おのれの咎を見つけ出し、それを憎むことで。:3 彼の口のことばは、不法と欺きだ。彼は知恵を得ることも、善を行うこともやめてしまっている。:4 彼は寝床で、不法を図り、よくない道に堅く立っていて、悪を捨てようとしな。:5 【主】よ。あなたの恵みは天にあり、あなたの真実は雲にまで及びます。:6 あなたの義は高くそびえる山のように、あなたのさばきは深い海のように。あなたは人や獣を栄えさせてくださいます。【主】よ。:7 神よ。あなたの恵みは、なんと尊いことでしょうか。人の子らは御翼の陰に身を避けます。:8 彼らはあなたの家の豊かさを心ゆくまで飲むでしょう。あなたの楽しみの流れを、あなたは彼らに飲ませなさい。:9 いのちの泉はあなたにあり、私たちは、あなたの光のうちに光を見るからです。:10 注いでください。あなたの恵みを、あなたを知る者に。あなたの義を、心の直ぐな人に。:11 高ぶりの足が私に追いつかず、悪者の手が私を追いやらないようにしてください。:12 そこでは、不法を行う者は倒れ、押し倒されて立ち上がられません。」

かつてJ.C.ライルという人物は、自身の著書「キリスト者の聖潔」でこんなことばを残していました。「クリスチャンの聖さについて正しく理解したければ、まず罪という巨大で厳粛な問題を検討しなければいけません。高い建物を建てるには、まず非常に深い穴を掘らなければならないのです。ここで考えを誤ると非常に困ったこととなります。聖さについての誤った見方は、たいてい人の墮落に関する誤った見方から来ていることが多いのです。…もし人が自分の魂が患う病の危険な性質を理解していないとすれば、偽りの、あるいは不完全な治療で満足していても何の不思議もありません。」。またトーマス・ワトソンという人物も短く、こんなことばを残していました。「罪が苦々しいものとなるまでは、キリストは甘くならない。」。この詩篇36篇は、まさにこの点に関して教えてくれているものでした。言いかえれば、私たちが自分の罪深さをより理解すれば、いかに神様の計り知れない恵みが私たちにとって尊いものであるかがよりわかるようになるということです。例えば思い返していただいて、イエス・キリストを信じる前、かつて罪の中に死んでいた時、だれかから福音を聞いた私たちは、自分自身の罪深さに気づかされて打ちのめされたはずです。余りにも自分が罪にか汚れた罪人で、自分に聖い神様の正しいさばきが必ず下されると知って、悲しみや絶望を覚えたことでしょうか。しかし、同時に、まさにその時に示された神様の大きな愛とあわれみ、救いを目の当たりにし、それを受け入れて私たちはことばで言い表すことのできないほどの感謝と喜びを主にささげたことでしょうか。私たちは自分自身がどれほど罪深い存在なのかを知れば知るほど、そんな自分さえも救ってくださった神様の豊かな恵みにますます感謝をささげたいと思うようになるのです。

そして、これはもちろん救われた時だけの話ではなくて、救われた後も変わることはありません。それぞれの信仰生活においても、もし自分自身がどんな存在だったのかを忘れてしまうのであれば、容易に感謝をすることを忘れるようになってしまうでしょう。たとえどんな状況にあらうと、神様が私たちに罪から救い出してくださったという事実があるだけで、神様にいつも賛美をささげるのに十分な理由があるはずなのに、多くのことで不平不満を口にしてしまうことがあります。また、神様の恵みがもた

らしてくれたすばらしい喜びや満足や平安を私たちが忘れてしまうのであれば、何か別のものに自分の喜びや満足を見出そうとするかもしれません。いろいろな誘惑に負けて、罪に走ってしまうこともあるでしょう。だからこそ、私たちにとって罪がいかに深刻な問題なのか、そのことを覚え続けることは、悪を離れて聖さを追い求めることにおいても、何より神様の恵みの偉大さについていつもほめ歌をささげることにおいても、私たちにとって欠かせないものになるのです。かつての信仰者たちはそのことをよく覚えていました。

果たして私たちはどうでしょう？先週の歩みを振り返って、どれほど私たちは自分自身の罪のみにくさを覚えていたでしょう。神様を愛しているからこそ、どれだけ自分自身の罪深さを覚えて、そこから何としてでも離れて、聖さに進みたいと歩んでいたでしょう？罪の罰から救い出してくださった主の恵みを覚えて、そのことが余りにもすばらしいからと、どれだけ私たちはこの方に感謝をささげていたでしょう。その事実をどれだけ喜んでいたでしょう。間違いなく私たちはみなこの点において、まだまだ成長しなければならぬ点が多々あると思います。

### ○計り知れない主の恵み：三つの場面

この詩篇は、大きく分けて三つの場面に区切ることができます。三つの場面を順に追っていきたいのですけれども、一つ目が1-4節「罪に汚れた人の心と生き方」についてです。二つ目は5-9節「計り知れない主の恵み」についてです。そして最後三つ目が10-12節「恵み深い主への応答」です。神様に対する応答に対して、著者であるダビデは順を追って描いてくれました。今から私たちはこのみことばをともに考えていきましょう。そして私たちが神様の前にどれほど汚れた存在であったのか、どれほど私たちが愚かな存在であって、そこから神様がどれほど大きな犠牲を払って救い出してくださったのか、愚かな罪人に対して、どれほど神様が恵み深くあってくださったのか、その重要な真理を改めて考えてみましょう。そして測り知ることのできない主の恵みのすばらしさを、いつも私たちが覚えて、それに感謝する者として成長していく助けと励ましになることを心から願っています。

#### **1. 罪に汚れた人の心と生き方 1-4節**

まず1-4節に、一つ目の場面「罪に汚れた人の心と生き方」についてが記されていました。ダビデは罪によって、人がいかに墮落している存在なのか、その様子をここに描いてくれました。1節に「罪は悪者の心の中に語りかける。彼の目の前には、神に対する恐れがない」とあります。ダビデがまずここで人の心が抱く二つの根本的な問題に関して挙げてくれました。

### **●人の心が抱く根本的な二つの問題：**

#### **1) 神様に逆らう罪のことばに耳を傾けること**

一つ目の問題は、人の心が神様に逆らう罪のことばに耳を傾けるということです。彼はまず「罪は悪者の心の中に語りかける」と言っていました。ここで二つのことばに注目してほしいのですが、一つ目は「語りかける」という動詞です。これは非常に興味深いことばで、基本的には「神様からの啓示」や「主の御告げ」を表す意味で、旧約聖書の中で約360回も用いられています。このことばが用いられていれば、預言者を通して、神様ご自身が人々に権威あることばを話されている様子が強調されていました。でも、ダビデはそれと同じことばを用いて、ここでは神様ではなくて、罪が悪者の心の中に語りかけている様子を描いていました。まるで罪が権威ある上からのことばかのように、その心にささやきかけ、語りかけ、そそのかすと言うのです。

また、もう一つ注目してほしいのは、人の心のうちに語りかけるこの「罪」ということばです。私たちはよくこのことばを目にしていますが、改めてこのことば自体を考えると、このことばには、「何かしらの権威を拒むこと」、政府や国家、王様に対して「意図的に逆らうこと」、そんな意味を持っていました。つまりこの「罪」は何かしらの権威に対して意思を持って背くこと、もっと言えば、ここでは神様やみことばの権威に対して意思をもって逆らうことを言っていました。

この二つのことばの意味を合わせて考えてみると、ダビデは最初に一体何を言わんとしたのでしょうか？彼は悪者の心のうちには、神様に意図的に逆らおうとする罪そのものが、心のうちに語りかけている。これが生まれながらの人間が持っている根本的な問題でした。罪人というのは、その心の中で神様に逆らうようにとささやく、その罪のことばに耳を傾け続けているからこそ、神様に従うことよりも、その神様を拒んで否定して生きることになると言うのです。

## 2) 神様に対する恐れがないこと

また、二つ目の問題は、人の心に神様に対する恐れがないことです。二つ目の問題として描かれているのは、そもそも人の心に神様に対する恐れがないことです。続きに「彼の目の前には、神に対する恐れがない」と書かれていました。ここで使われている「恐れ」ということばですが、まずこの「恐れ」ということばを聞けば、すぐに畏敬の念や畏怖のことという恐れをイメージするかもしれませんが、ここで使われている恐れというのは、何かに対して「ひどい恐れや恐怖を抱くこと」、特に何かの結果や罰、さばきが伴うことに対する非常な恐れを強調するという意味を持っていました。本来であれば、創造主なる偉大な神様に対して恐れを抱くことは正しい態度になります。しかし、罪人はどんなことをしようとも、そこには何の結果も伴わないと信じているのです。自分の心の望むままに生きていようとも、それに対するさばきがやって来ることは絶対はないと思込んでいるのです。そもそも神様なんていないと心に決めているからこそ、罰を恐れる思いすら心のうちにはありませんでした。ダビデはそんな悪者の姿を同じ詩篇 10 : 3-4 でも「:3 悪者はおのれの心の欲望を誇り、貪欲な者は、【主】をのろい、また、侮る。:4 悪者は高慢を顔に表して、神を尋ね求めない。その思いは「神はいない」の一言に尽きる。」と描いています。自分たちのやっていることはバレない、神様のさばきなど存在しないと思っているからこそ、その人物は神様に対して全く恐れを抱こうとはしないのです。これも罪人が抱えている根本的な問題の一つでした。

ここで少し考えてみてください。もし私たちが間違っていること、してはならないとされていることを破って行った、まさにその瞬間をだれかに見られたら私たちはどんな態度をとるでしょうか？ある人は素直に謝るかもしれませんが。ある人は自分のしたことを何とかして言い逃れようとするかもしれません。ある人はそれを必死に隠そうとしたり、もっともらしい理由を並べ立ててごまかそうとするかもしれません。でも、なぜそんなことをするのでしょうか？どうして私たちはそもそも隠したり、ごまかそうとしたり、そんな行動をとるのでしょうか？それはもちろん、そこに罪があるからですけれども、それは、自分の罪や過ちをだれかに知られることを恥ずかしく思ったり、何よりその事実が明るみに出て、深刻な結果がもたらされることを恐れるからです。私たちはだれかが横でじっと見ていれば、その目を覚えて、何かしらの結果や罰が伴うようなことから離れようとするでしょう。でも不思議なのは、すべてのことを今もなおご覧になっておられる神様が存在しているにも関わらず、そこには何の関心も払おうとはしないのです。悪者はそのようにして神様の目を見ようとはしない、気かけようともしない。みことばははっきりと、神様が人の外側だけではなく、心の奥底でどんな考えを思いめぐらせているのかということもご存じだと教えていました。人には見えないものであろうと、この方の目にはすべてが明らかなのだを教えていました。例えば箴言 15 : 3 にも「【主】の御目はどこにでもあり、悪人と善人とを見張っている。」とみことばは教えています。でも、神様に逆らう者は、その目を無視して、神様は本当はご覧になっておられないのだ、決して自分のしていることに結果が伴うことはないのだと言い聞かせることで、神様に従わない生き方をやめようとはしないのです。神様が存在していないのなら、神様のさばきも存在していません、神様を恐れられない心は、人の抱えている大きな根本的な問題の一つでした。

●根本的な問題に影響される人の生き方：

そして、そのような問題を心の奥底に持っていれば、当然、それはその人の態度や歩みにも大きな影響をもたらすようになります。どのような影響が与えられるのか、ダビデは2-4節で神様を恐れぬ悪者の生き方の特徴を四つ挙げてくれました

#### a) 自己欺瞞

まず一つ目の特徴は自己欺瞞でした。神様を恐れようともせずに、その権威に逆らうような心を持つ者は、自分自身を欺くことで罪を犯すことを何の問題もないと考えているのです。こんなふうに2節は始まっていました。「**彼はおのれの目で自分にへつらっている。おのれの咎を見つけ出し、それを憎むこと**で。」と。ここで使われている「へつらっている」ということばは、もともと「何かを滑らかにすること」、「何かを滑りやすくする」といった意味が含まれていました。このことばはそんなイメージがあるのです。そして、ここからお世辞を言ったり、媚を売ること、うまいことばで人をだますことを表したりもするのです。神様を恐れぬ人物は、だれでもない自分自身に対して媚を売って、うまいことばで自分自身を欺こう、だまそうとしていました。もっと言えば、この人物は自分が罪を犯す上で障害になり得そうなものを、へつらうことで取り除こうとするのです。例えば罪を犯した時に、私たちは罪悪感や良心の責めを覚えます。そういうものをもし覚えたならば、その人物は自分自身に小さな問題だから、小さな罪だから大丈夫だと語りかけるのです。周りの人たちもみんなやっているから、別に何の問題もありませんと。これが最後の一回です、もう二度としませんと。こうやって自分自身の罪をほかの人と比べたり、罪を罪としてそのまま扱うのではなくて、大した問題ではないと言い聞かせることによって、罪悪感を拭い去って滑らかにしようとするのです。

また、例えば自分を傷つけた相手に対して、怒りや憤りといった思いを心のうちにずっと覚える時も、自分はいつまでも怒っていても大丈夫ですと、自分自身に語りかけるのです。相手に冷たい態度を取っていたとしても、私にはその権利があるのですと。なぜかという、それは相手が先に始めたから、別に自分は間違った態度をとっていても大丈夫なのだと。こうやって自分自身に真理ではなくて、偽り事を語りかけることを通して、滑らかにしようとするのです。罪の責任をほかの人になすりつけたり、言い訳をして自分の罪の正当性を主張しようとしたりします。本来であれば神様の前に罪がいかにか汚れたものかを覚えれば、それを軽蔑して離れようとするべきなのに、それを偽りで覆い隠すことで、問題として取り扱わないようにするのです。覆い隠すことによって、滑らかにしようとするのです。罪を犯し続けていくために、自分の間違った態度を正されないために、聞かなければならない真理を自分自身に語るのではなくて、自分の心が聞きたいことばを語りかけて、自分を欺くように話すこと、それが一つ目の神様に逆らう者の特徴でした。

#### b) 悪意に満ちたことば

二つ目の特徴は「**悪意に満ちたことば**」でした。3節の前半に「**彼の口のことばは、不法と欺きだ**」とあります。これまで見てきたように、悪者が心のうちで神様に逆らう罪のことばに耳を傾けていて、神様を恐れようともせずに、自分自身が罪を犯し続けるために自分自身を偽ることばを語りかけているのであれば、その人は一体どんなことばを口にするようになるのでしょうか？そのような心がうちにある人は、当然神様の忌み嫌われる正しくないことばを発するようになるのです。自分自身を欺くような心を持った人が語っていることばは、ほかの人に対しても悪意と欺きに満ちたものになることがあるのです。まさにこの点に関してイエス様がマタイ12:34-35で言われていました。「**34 まむしのすえたち。おまえたち悪い者に、どうして良いことが言えましょう。心に満ちていることを口が話すのです。35 良い人は、良い倉から良い物を取り出し、悪い人は、悪い倉から悪い物を取り出すものです。**」と。イエス様ははっきりと心のうちにあるものが必ず口から出てきますと言われていました。私たちが不平不満を口にしているのであれば、私たちの心のうちに不平不満があるということです。私たちが何かうわさ話や陰口をしているのであれば、何かしらの思いがそのうちにあるということです。口が語っていることば

がどれだけ大きな問題を引き起こすことがあるのか、よくご存じだと思います。人を励ますことができるこのことばをもって、私たちは人を傷つけたり、悲しませることがあります。人を慰めることができるこのことばでもって私たちは嘘をついて裏切ったり、皮肉や陰口を言うこともあります。人を喜ばせることもできるこのことばで、いやもつと言え、主をほめたたえるこのことばで相手に媚び、機嫌を取るためにへつらったり、相手を非難するようなことを口にすることもあります。うわさ話やゴシップを通して人の評判を傷つけて、関係を壊すこともあります。私たちのことばが大きな問題をもたらすことがあるのです。でも、このことばに関して最も深刻な問題は、私たちの口は単に心に満ちているものを語っているにすぎないということです。心が悪意に満ちているのであれば、そのことばも当然悪意が満ちたものになります。私たちが周りを見渡した時に、いろいろな人たちがうそや偽りを話していて、悪口が飛び交っていて、陰口が横行しているのを見た時に、私たちは驚くことはないのです。聖書がそのとおりに言っているからです。心に満ちているものが出てくるのだと。神様に逆らっているその思いがあれば、神様の前に正しくない思いを持っている人がいるのであれば、それはそのままことばとして出てくるのだと。神様を恐れない者の持っている二つ目の特徴は悪意に満ちたことばを話すということでした。

### c) ねじ曲がった考え

そして、三つ目の特徴は「ねじ曲がった考え」でした。3節の後半に「彼は知恵を得ることも、善を行うこともやめてしまっている」と続いています。主を恐れず心が偽りに満ちた人物というのは、話すことばだけではなくて、物事を考えることにおいても、知恵ある健全な考えができなくなっているのです。でもそのとおりにだと思いませんか？この人物は罪を罪として正しく見ようともせず、さばきは決して来ないと思っているのです。神様を恐れる思いがないのです。そんな者は神様の前に善を行うことなどは一切考えないと言うのです。知恵を得ることも、神様の前に善を行うこともやめてしまっている、これが三つ目の特徴でした。

### d) 罪に汚染されたふるまい

そして最後、四つ目の特徴として挙げられていたのは「罪に汚染されたふるまい」でした。4節に「彼は寝床で、不法を図り、よくない道に堅く立っていて、悪を捨てようとしな」とあります。心の中で悪を思いめぐらせて、罪の声に耳を傾けて生きるような者は、神様に従うことよりも自分の思いのままに罪を生きることを求めています。余りにもその思いが強いものであるからこそ、この人物は本来人が休息のために横になる寝床にあっても、限りなく罪を犯すことを考えるのです。まるで箴言4：16に書かれている人物そのものでした。「彼らは悪を行わなければ、眠ることができず、人をつまづかせなければ、眠りが得られない。」と。罪を憎むべきなのにもかかわらず、それを憎まないで、神様が見るように罪を見るべきなのに、それを見ないで歩む者は、そんな罪に汚れた者はいつまでも悪を捨てようとはせず、自分の欲の中を堅く歩み続けるのです。良くない道に堅く立っていて、それが良くないとわからないから、悪を捨てようとはしない。これが四つ目の特徴でした。

さて、これが聖書を見た時に、そこに記されている罪に汚れた人の姿だったのです。でも、もしかしたら、ある人はこう思ったかもしれません。私はこんな悪者ではありません、私はこんな罪人ではありませんと。でもみことばははっきりと、キリストを知らない生まれながらの人間はみんな例外なく、神様に逆らう罪人なのだと教えてくれていました。私たちはみんなこんなものだったということです。そのことをパウロもローマ書3章で教えてくれています。レジメには1カ所だけ記していますが、ローマ書3章は一体何が書かれていたのか覚えていますか？ここにはパウロはユダヤ人であろうが、異邦人であろうが、この世のすべての人が義人ではないと語っていたのです。義人はいません、ひとりもいません、悟りのある人はいません、神を求める人はいません。そうやってパウロは旧約聖書のみことばを引用しながら、すべての人が罪人なのだと言っていたのですけれども、その彼は最後締めくくりの

3 : 18で、この詩篇36 : 1の後半部分「彼の目の前には、神に対する恐れがない」というみことばを使っていたのです。

パウロはわかっていました。この世界に生きている、生まれながらの者はみな神様に逆らって生きているのだと。義人はひとりもいないと。神様を恐れる者はひとりもいないと、私たちがみな生まれながらに神様の前に罪人だと認められる、そんな存在だと言うのです。ですから、ローマ書3章を見ても、詩篇36 : 1-4にしても、人はあらゆる面において墮落しているということを描かれていました。そして、そんな私たちは神様の前に一つとして良いことが、喜ばれることができるような存在ではなかったのです。生まれながらの人間はみな神様の前に有罪とだけ認められる、そんな存在でした。そして、そんな私たちにふさわしかったのは、ただ神様からの御怒りにしか過ぎませんでした。

## 2. 計り知れない主の恵み 5-9節

### ●神様の四つのご性質 :

さて、ここまで私たちは、人がいかに神様の前に汚れた罪深い存在かを見ました。でも、そこで聖書は終わってはいませんでした。ダビデは罪に汚れた人の心と生き方について向けたその目を、今度は神様の完璧な偉大さに向けようとするのです。「:5【主】よ。あなたの恵みは天にありあなたの真実は雲にまで及びます。:6 あなたの義は高くそびえる山のように、あなたのさばきは深い海のように。あなたは人や獣を榮えさせてくださいます。【主】よ。」と語っています。ダビデは、主に目を向けていました。1-4節で主を恐れぬ悪者の特徴について語っていたダビデは、ここではほめたたえられるべき神様のご性質について触れているのです。ダビデはここで特に四つのご性質を取り上げていました。

#### 1) 主の恵み

まず一つ目に挙げられていたご性質は主の恵みでした。5節を見ると、「【主】よ。あなたの恵みは天にあり」とあります。この「恵み」ということばは、これまでも何度も学んできたものになります。旧約聖書の中で頻繁に、主との契約やその契約に対する主の誠実さを表わすのに用いられることばでした。神様はご自分の民と契約を結ばれ、彼らのことを愛しておられるからこそ、その約束を必ず守られるのです。値しない者に注がれる主の契約の愛、主の恵みは、どんな時も変わることもなければ、いつまでも途切れるものではないということです。

#### 2) 主の真実さ

二つ目に挙げられていたご性質は主の真実さでした。5節の続きに「あなたの真実は雲にまで及びます」と書いていました。この「真実」というものは、神様がご自身の約束とことばを必ず守られるお方だということです。そしてそれゆえにいつも信頼できる存在なのだということを意味していました。以前見た詩篇33 : 4でも「まことに、【主】のことばは正しく、そのわざはことごとく真実である。」と記されています。主は決して変わることがなくて、いつもすべてのことにおいて正しいことをなされるのです。そしていつもことごとく正しいことをなされるお方であるからこそ、どんな状況にあらうと、私たちは身をゆだねることができるお方なのだともみことばは教えてくれました。

#### 3) 主の義

そして三つ目に挙げられていたご性質は主の「義」でした。6節「あなたの義は高くそびえる山のように」とあります。この「義」ということばは、神様がそのご性質において、その本質において正しいお方であるからこそ、いつも正しいことをなされるということです。この方こそが義の基準そのものであるからこそ、だれからも間違っていると、罪を責め立てられるようなことは絶対にないのです。

#### 4) 主のさばき

そして最後四つ目に挙げられていたご性質は主の「さばき」でした。6節2行目に「あなたのさばきは深い海のように」とあります。この「さばき」というのは、今、私たちが見た義と大きく関わっているものですがけれども、この方の下されるさばきというものがいつも正しいものであるということの意味し

ていました。神様がすべての正しさの基準であるからこそ、この方がその基準に基づいてなされるさばきはいつも知恵に満ちていて、欠けたところなど一つもないということです。詩篇50：6には「天は神の義を告げ知らせる。まことに神こそは審判者である。」と書いています。この義なる神様こそすべてのものを正しく誠実にさばかれるお方でした。この方こそ、義の審判者として、今も変わらずに生きておられる存在でした。

こうしてダビデは神様の恵み、真実さ、義、さばきといったすばらしいご性質を人々に思い起こさせようとしたのです。でも読んでいた皆さんは、恐らく気づかれたと思います。ダビデはここで単純に四つの性質を並べていたのではありませんでした。それらの性質と自然界にあるものを掛け合わせて描いていたのです。「:5【主】よ。あなたの恵みは天にありあなたの真実は雲にまで及びます。:6 あなたの義は高くそびえる山のように、あなたのさばきは深い海のように。」と。なぜダビデはこのようにして神様のご性質と自然界のものをあわせて記していたのでしょうか？ポイントはこういうことです。この地上に存在する余りにも壮大で力強いもの、私たちから見たら、そういうふうに見えるものと並べることで、いかに主のご性質が人には決して理解することも、測り知ることもできない偉大なものであるかを示そうとしたのです。

例えば雲や天というものが出てきました。それらがどれほど高いものかを、私たちは果たして測ることができるでしょうか？だれにもできないのです。だれも天の高さがどこまであるのかを測ることはできません。主の恵みも主の変わることもない愛も、これと同じように、これよりもさらにすぐれて、だれにも測ることはできないということです。限界などというものはないということです。この方の真実さは、人の限られた理解では到底及ばないものだということです。天や雲もそうでした。高くそびえる山はどうでしょう？高くそびえる山を私たちが覚える時に、こんな山を自分たちの力で動かすことはだれにもできないのです。それと同じように、主の義というものは決して揺り動かされることはなく、不動のものであるということです。また山というのはだれの目にも明らかですよね。高ければ高いほど遠くからでも認識することができるのです。主の義もだれにとっても明らかなのだとということです。この方の義を脅かすことができる者はだれひとりとしていないし、この義はみなに明らかなのだと。また深い海は最初に見た天や雲と同じで、これも私たちはどれほど海が深いものなのかを測ることはできないのです。それと同じように、主のさばきというものも、余りにも深いものであるからこそ、だれにも測り知ることはできないということです。神様のさばき、神様の判断というものは、知恵と知識にあふれたものであって、私たちの限られた頭ではどうあがいたって理解することはできない。その深さを理解することは私たちにはできないと。パウロはこの点に関して、ローマ11：33で「ああ、神の知恵と知識との富は、何と底知れず深いことでしょう。そのさばきは、何と知り尽くしがたく、その道は、何と測り知りたいたいことでしょう。」と述べていました。神様のご性質はそれだけ深く、それだけ偉大なのだ、そして私たちがこんな神様の偉大な姿を覚える時に、この地上で何かそれと比べられるようなものを一つとして見つけることはできないのです。ましてや、私たち自身が自分たちの罪深さを正しく覚えるのであれば、この方のすばらしさを前にした時に、この方の偉大なご性質を前にした時に、何のことばですら発することは本来できないと言うのです。

でも、そんな偉大な力を持った神様は、さらに驚くべきことをなされていました。6節の最後に「あなたは人や獣を榮えさせてくださいます。【主】よ。」と記されています。何が言われていたのかというと、これは神様が人や獣、すべての被造物に対して分け隔てなく恵みを注ぎ、榮えさせてくださるということです。よく“一般恩寵”ということばで表したりもしますがけれども、神様は悪い人にも良い人にも太陽を昇らせて、正しい人にもそうでない人にも雨を降らせてくださるということです。詩篇145：9にも「【主】はすべてのものにいつくしみ深く、そのあわれみは、造られたすべてのものの上にあります。」とあります。これを考えた時に、少し立ち止まってみてください。私たち、本来であれば、1-

4節で見たような罪に汚れてどうしようもない罪人であり、値するものは神様のさばきでしかないということを見たのです。そのとおりでした。聖い神様の前にこんな罪深い者が立つことなど、この聖い神様の恵みに値するなど考えられないのです。でも、そんな罪人に対して、神様は今もなおまだ忍耐をもって接してくださっていて、ひとりひとりに対しても恵みを注いでくださっていると言うのです。本来であれば、すべての人が一瞬にして滅ぼされてもおかしくないような罪に汚れているにも関わらず、神様は今もなおまだ忍耐をもって、ひとりでも多くの者が悔い改めへと進むことを願っておられる。そのようにして恵みを注いでくださっている。これが、神様が与えてくださった計り知れない恵みでした。

でも、この恵みはここで終わりではありませんでした。ダビデは続けて7節で「神よ。あなたの恵みは、なんと尊いことでしょう。人の子らは御翼の陰に身を避けます。」と言います。ここでダビデは人の子らが御翼の陰に身を避ける様子を描いていました。これは一体どんな意味を持っているのでしょうか？例えば敵や危険が迫ってきた時に、ひな鳥は自分の力で自分のことを守ることができないのです。だからこそ、ひな鳥は親鳥の羽のもとに身を寄せようとします。そうすれば、親鳥が守ってくれるから、安心して身を休めることができるのです。自分の敵から自分の力で自分を守ることはできないけれども、親鳥が代わって迫ってきた危険を追い払ってくれるのです。親鳥の翼の下に身を寄せるということは、安全が保障され、守りが約束されるということです。これと同じように主に身を避ける者というのは、自分のうちに何もないと認めているのです。自分には何も無い、でも主のうちに守りと救いを見出そうとするのだと。神様は、自分の罪深さを認めて、ご自分のもとに信仰を持って救いを求めてやって来る者に対して、その者に必要な守りや助けを恵みによって与えてくださるお方でした。

本来であれば、1-4節のような者に対してはさばきしか値しないにもかかわらず、神様の前に罪を悔い改めて、この方に助けを求めて、この方の前に自分を捨ててやって来る者には神様は守りを与えてくださると言うのです。この1-4節と主の恵みを見比べた時に、すばらしいと思いませんか？神様の愛というのは変わらないものでした。本来であれば、罪に汚れて神様に逆らって生きているような私たちに対して、主はあわれみを示してくださって、値しない罪からの救いを神様はキリストを通して、私たちに備えてくださっていたのです。またダビデは8-9節でこのように言っていました。「:8 彼らはあなたの家の豊かさを心ゆくまで飲むでしょう。あなたの楽しみの流れを、あなたは彼らに飲ませなさい。:9 いのちの泉はあなたにあり、私たちは、あなたの光のうちに光を見るからです。」と。簡潔に言えば、主を信じて恵みによって救いを与えてくださるお方に、いのちの源である神様のもとにへりくだってやって来るのであれば、その者には楽しみや満足、豊かな喜びをも神様は十分に与えてくださると。その神様のうちに喜びを見出すことができるのだと。神様のもとに身をゆだねる時に、神様ご自身がその者に守りや平安、喜びを与えてくださるのだと言うのです。

1-4節のような者に対して、恵み深い神様は救いを与えてくださり、守りを与えてくださり、喜びさえも与えてくださると。だとすれば、果たして私たちは一体どれほど自分自身の罪深さをいつも覚えているのでしょうか？そして、そんな者に対する神様の恵みの偉大さをどれだけ覚えているのでしょうか？私たちが何かを与えられる時に、果たして私たちに値するものなど存在するのでしょうか？私たちはすべて恵みによって生かされているのです。私たちの救いもすべて恵みであって、私たちの日々の生活に必要なものもすべて恵みであって、私たちが日々の生活においてキリストに似た者へと変えられていくその助けも力もすべて恵みによって与えられているのです。だとすれば、私たちはこの方に向かって何を言うことができるでしょうか？ダビデは7節で「神よ。あなたの恵みは、なんと尊いことでしょう」、余りにも尊過ぎますと言っていました。余りにも自分にはすばらしいもの過ぎますと、神様に感謝していたのです。自分自身がいかに愚かな者であるかを知っている者は、神様の恵みを覚える時に、そのことに心からの感謝をささげようとするのです。果たして私たちはどうでしょう？

### 3. 人の応答 10-12節



ここまで私たちは「人の汚れた心と生き方」、また「主の計り知れない恵み」について、1-9節で考えてきました。最後にダビデは、この二つの事実を覚えた時に、人がなすべき正しい応答を10-12節でまとめてくれました。「:10 注いでください。あなたの恵みを、あなたを知る者に。あなたの義を、心の直ぐな人に。:11 高ぶりの足が私に追いつかず、悪者の手が私を追いやらないようにしてください。:12 そこでは、不法を行う者は倒れ、押し倒されて立ち上がられません。」と。主の恵みのすばらしさを知り、自分自身の愚かさを知っていたダビデが何をしていたのかと言うと、それは主の恵みが自分自身に対して、また同じように主を愛して、主を知っている者たち、主に従う者たちの上に注がれることを祈ることでした。彼は自分の周りには、まさに1-4節に書かれているような高ぶる者や不法を行う者たちがいることをよくわかっていました。実際に自分もそうだとということがわかっていたのです。だから、そのような世の中で歩いていくことに難しさがあることも覚えていました。でも同時にそのことを覚えているからこそ、彼は自分の愛する神様がいかに恵み深いお方であって、自分自身がこの方の助けなしには生きていくことができないということを知っていて、いつもこの方に助けを求めていたのです。彼は神様に向かってへりくだって、助けを祈り求めていました。自分自身がいかに主の助けが必要であるかということを知っていたのです。自分自身の罪深さを覚えている者は、自分の力や知恵に頼り頼んで生きていこうとはしません。ダビデを見ても、自分の弱さや愚かさを知っていたからこそ、ただ、自分に必要な神様の力に身をゆだねて歩いていこうとしていました。そしてそんな歩みにこそ、彼は喜びや勝利を見出していたのです。

だとすれば、私たちは果たしてどのように歩んでいるのでしょうか？どれほど自分自身の罪深さを日々覚えているのでしょうか？どれほどひどい罪人であった者を恵みによって救い出してくださったのかということを知りたいのでしょうか？私たちの罪がいかに神様の前に汚れたものであるかを覚えるからこそ、そこから離れて愛する神様に喜ばれる者として、キリストに似た者として生きていきたいと願っているのでしょうか？ありえないほどの測り知れない恵みを与えてくださった主の恵みを心から感謝して、この方に賛美をささげて生きているのでしょうか？私たちの愛する主イエス・キリストは罪人のために十字架にかかってくださいました。本来受ける必要のない苦しみを受けられ、罪を知らない神の御子であるお方が私たちの代わりとなって、大きな犠牲をもって私たちを神様の前に義としてくださったのです。この方によって、私たちは神様の前に義とされました。この方は値されないことを私たちの代わりにしてくださいました。本来私たちが受けるべきものをこの方が代わりになしてくださいました。その恵みを覚える時に、その愛を覚える時に、果たして私たちは、この神様に対していつもどのようにして歩いていこうとするのでしょうか？罪が苦々しいものとなるまでは自分にとってキリストというものは甘くならないのだと、信仰者は言っていました。私たちの願いは、ますますキリストを愛して、ますます神様に従って、そしてこの方が憎まれる罪をますます私たちも忌み嫌って、この方の栄光を現すために生きていくことです。いつも自分たちがどのような者であったのか、そしてどのような恵みによって私たちが救い出されたのか、そのことを覚えてともに歩いていきましょう。